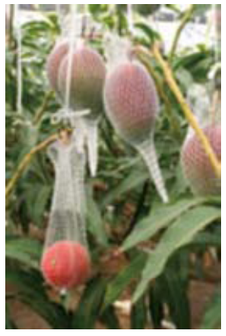
陸の孤島“宮崎”

■太陽と緑の国

神話の国宮崎は、1959年、当時の皇太子殿下（現天皇陛下）の新婚旅行、続いて1960年、NHK朝の連続ドラマ“たまゆら”（川端康成原作）の放送で、黄金時代を迎えた。太陽と緑の国“宮崎”をキャッチフレーズに、その後は新婚旅行として多くの観光客が訪れることとなった。手軽な観光地として多くの人々を迎えたが、第一次オイルショック（1973年）を境にそのブームも過ぎ去った

■建築

1960年代に完成した建築には、日南文化センター（丹下健三　1962年）、都城市民会館（菊竹清訓1966年）がある。当時の宮崎県の小さな市の首長二人が、同時に日本を代表する二人の建築家に依頼したことは意外である。



宮崎会の情報はこちら
http://www.jia-9.org/miyazaki/

一万人の世界建築家展
http://www.10000architects.com/?jp

■注目の県知事

2007年1月、宮崎県知事選挙でタレント候補“そのまんま東”（東国原英夫氏）が圧倒的な支持を得て当選。東国原英夫宮崎県知事の誕生に一躍全国の注目を浴びる事になった。知事就任初登庁で県職員への挨拶の中に、「裏金はありませんか」の一言は強烈な印象で耳に残る。そこにいたのは正に宮崎県知事東国原英夫であった。

就任早々知事の椅子を暖める間も無く、高病原性鳥インフルエンザの発生。宮崎県は勿論、農業団体や養鶏農家も対応におおわらわであった。新米知事はいつもノート片手に現場を飛び回り、慣れないなかで陣頭指揮を取った。それにマスコミ慣れした語りが安心安全を素早く全国へとアピールし、被害を最小限に食い止め県民の信頼は一層高まった。

マスコミの注目度が増すと全国からの観光客も一気に増えた。宮崎の観光が目的ではない。県知事を見に来、ついでに県庁を見学する。慣行物産館はじめ、近隣の飲食店、宿泊施設は随分にぎわった。

宮崎県の特産品も大いに話題になった。その代表が完熟マンゴー“太陽の卵”である。一つ一万円を超えるマンゴーが飛ぶように売れた。おかげで地元の人にとっては高嶺の花になり口に入らなくなった。寂しい現実である。

2009年夏、天下分け目の衆議院選挙。マンネリ化して国民の信頼をなくした政権与党は、藁をも掴む思いで東国原英夫宮崎県知事への立候補を要請した。マスコミの頂点にあった知事は、党総裁を条件に立候補の意思を表明した。この発言は大誤算、県民は「知事は宮崎を見放した」と感じた。この“事件”でマスコミからの批判が高まり、取材の数も激減、宮崎のピークは去った。

2010年4月、今度は家畜伝染病口蹄疫の発生だ。いきなり宮崎県の畜産業に襲い掛かり、またたく間に県央から県南へと広がり、隣県をも脅かすほどの大被害へと広がっていった。宮崎県は東国原知事を陣頭に対応に追われた。しかし、見えない敵との戦いである。半径10km圏・20km圏だとか、移動制限、抗体ワクチンを接種し全頭殺処分、沈静化したのは8月、終息まで5ヶ月もかかった。その傷跡はいまだに癒えない。

そして2011年1月、東国原英夫氏は宮崎県を去った。

■さらなる災害

2011年1月、再び高病原性鳥インフルエンザの発生、新燃岳の噴火、度重なる災害は立ち直る暇もないほど忙しい、しかし、全国からの暖かい支援に勇気付けられ、少しずつ復興へ向かって歩み始めていた。2011年3月11日、東日本大地震の発生である。死者不明者約2万人、特に東北地方太平洋側では大津波での被害も尋常ではなかった。何度も何度も繰り返す津波に、何もかも飲み込まれ、限りなく瓦礫だけが続くあまりの光景に愕然とした。家族も家も全てを無くした人達、まさにマイナスからのスタートである。そのよう多くの人達を、今度は宮崎から応援し、一緒に一日でも早い復興を望みたい。

■未来へ

殆ど放送されることは無かったCMが、カンヌ国際広告際で金賞を受賞した。九州新幹線のCMだ。2011年3.月12日博多・鹿児島中央間が全線開通した。東日本大震災の翌日のことだ。宮崎からは、高速バスで約2時間、新八代駅で新幹線に乗り継ぎ、博多・大阪へと向う事になる。まだまだ都会へは遠い宮崎である。

ある人口予測によると、2050年の日本の人口は9000万人を割り込んで1955年頃の人口になると予想されている。人口は減少し、原発神話は崩れ、経済は停滞し、技術は流出し、高齢化は進んでいく。日本という国さえ危うく見える。